# 静岡県沼津市におけるWikipedia Townの実践例

木村聡（沼津市教育委員会）・
市川博之（Code for ふじのくに／東京造形大学）・
市川希美（Code for ふじのくに）

Wikipedia Town in Numazu City

Kimura Satoshi（Numazu City Board of Education）・
Ichikawa Hiroyuki（Code for Fujinokuni/Tokyo Zokei University）・
Ichikawa Nozomi（Code for Fujinokuni）

・市民協働／Citizen collaboration・オープンデータ／Open data
・シビックプライド／Civic pride・古墳／Kofun

## はじめに

沼津市は豊かな自然と温暖な気候に恵まれた首都圏から約100㎞に位置する静岡県の東部地域にある。愛鷹山や旧浮島沼などを有す市域北部は旧「駿河国」、駿河湾沿いに集落が展開する市域南部は旧「伊豆国」という、市内に旧国がまたがる全国的にも珍しい市域で、古くから広域拠点都市として発達してきた。それゆえに多種多様な文化財が残されており、古くは約38,000年前ともされる旧石器時代の遺跡から海軍工廠などの戦争関連遺跡まで広く存在する。

しかしながら、文化（財）関連施設は市内に分散していることもあり、沼津市の文化財行政は豊富な文化財について効果的な情報発信が行えていないという課題がある。こうした課題に対し民間組織であるCode for Numazu（現、Code for ふじのくに）は、市民が情報スキルを身に着けて、地域の情報発信を自らの手でできるよう取り組みを行ってきた。

その一環として実施されたのが、沼津市の文化財についてWikipedia記事を作成するという試みである。記事作成は、民間・市民が主体となって実施し、沼津市教育委員会はこれを補佐するという体制で行われ、すでに実際に現地を訪れてから記事執筆を行うWikipedia Town in沼津の開催は15回（令和3年末段階）を数える。この実施回数は全国的にも多いものであって特筆すべきことと考えるが、実施回数とともに著者らが紹介したいのは、行政発の情報発信ではなく、市民らが自身で調べた文化財情報を執筆しているという点である。

こうした民間主体による取り組みは今後の文化財の持続的な保存、さらには活用において、重要な事例になると考え、本稿ではその実践例を紹介するとともに、関わったそれぞれの立場から成果と課題を述べてみたい。

## 1. Wikipedia Townの開催に至る経緯

### （1）沼津市における文化財情報の現状

令和3年末段階における沼津市の指定文化財は、国指定13件、国登録7件、県指定28件、市指定45件である。また周知の埋蔵文化財包蔵地は420か所以上である。指定文化財については沼津市HPにて一覧表を公開しているが、その他文化財に関する情報はHPに概要と概略地図のみを公開するという形態で、詳細な情報は沼津市史や各種調査報告書に委ねているものが多い。近年こそ全国遺跡報告書総覧にも沼津市文化財調査報告書を掲載して改善を図っているが、Wikipedia Townの活動を開始した段階でWEB上においては、沼津市公式が提供する概要情報しか得ることができず、詳細な文化財情報を得るには図書館や公共施設で図書や報告書を実際に閲覧するしかなかった。

多様な文化財を有しているにもかかわらず、それらがWEB上においてヒットしない、もしくはヒットしたとしても概略情報のみであるという状態は、

沼津市が持つ豊富な文化財を有効に活用できていないことに他ならないことから、この課題に対してCode for Numazuは、自らが沼津市の文化財情報を発信する事業としてWikipedia Town in 沼津を開始した。

### (2) Code for Numazu/ふじのくにの目的と沼津市の対応

Code for ふじのくには、静岡の地域課題について市民自らがテクノロジーを活用して解決していこう！という目的のために、2015年に発足した任意団体である[1)]。開始当初は、沼津市のデータの可視化を通じた課題確認や、マッピングパーティと呼ばれる誰もが自由に使えるOpenStreetMapと呼ばれる地図データの作成を実施しつつ、行政の持つオープンデータ公開数を増やすために、沼津市役所に実に8回も通い関連部門への説明の末、観光客も利用できる避難所、Wi-Fiの設置場所、レンタル自転車の場所の情報をオープンデータとして公開することができた。現在は、静岡東部だけではなく、静岡県内全域でオープンデータを活用した市民協働による地域課題解決を進めている。

また、普及啓発という意味で、地域のICT人材の育成や、ネットワーク化も進めており、オープンデータを利用したアイデアソン・ハッカソンや、勉強会の開催、自治体職員向けのスマートシティのセミナー、インターナショナルオープンデータディなどのイベント開催している。

最近では、静岡県庁と協力し、県庁が日々公開しているコロナ感染者のオープンデータを利用して静岡県の新型コロナウイルス感染症対策サイトを構築している。アクセス数は多いときには日に20万を超える時もあり、情報の透明性にも一役買っている。

そのような活動の中で、Code for ふじのくにの定例のなかで、沼津市は文化財が多いのに、あまり知られていないという課題が挙がり、調べてみると確かによくわからないものが多いことがわかった。そこで、解決方法として、他の地域で実施していたWikipedia Townという活動を2017年に取り入れ自分たちで地域の資料を使ってデータを作るということに取り組み始めた。最初に企画した際には、自分たちで調べればできるだろうと動いたが、実際にはその過程で多くのウィキペディアンと呼ばれる人たちの協力を受けながら開催をしている。数回開催の後、沼津市の民間支援まちづくりファンドも利用しながら2017年度、2018年度とWikipedia Townを続けていった。当初は図書館の利用料に民間支援まちづくりファンドを利用しようと思い参加したが、利用料は沼津市の文化財について、図書館を利用し、沼津市が調査している資料を使ってデータを作成する取り組みのため、後に減免となった。また、図書館職員にも、事前のリファレンスや当日の調査の協力など信頼関係も築けたのが大きい。ここに、市民活動（シビックテック）＋図書館＋沼津市役所の連携ができてきたのである。

また、当初から目標の1つとして、Wikipedia Townの始まりの場所モンマス（ウェールズ）の取り組みを強く意識し、「Wikipedia TownとはWikipedia記事にアクセスし易い環境が整った街であること」を実現するために、市民自らが情報を作成し、データにアクセスできる取り組みをどのように沼津市でしていくかを議論しながら進めた。これは、最初の高尾山古墳、長塚古墳の際には古墳への観光地図にQRコードを付ける形から始めて、最終的には文化財の看板にQRコードを貼り付けてアクセス可能とすることに至った。地域の清掃活動と同じように、地域の情報は地域の人が作る、それを形にしているのである。

こうした民間からの提案された活動に対し、沼津市の対応は下記のとおりであった。

1) 市職員（文化財センター学芸員）が活動を支援し、記事内容の質を担保する。
2) Wikipediaはアクセス数が多いとはいえ、沼津市の公式HPではなく、だれもが編集できる民間のWEBサイトであることから、市職員は執筆者に情報提供を行うのみとして、執筆自体は行わない。

3）情報提供とは、記事の対象となる文化財をめぐって解説すること、及び関連する文献を紹介することであり、記事内容の誘導は行わない。

1）については、文化財調査報告書などの専門的内容を含む書籍を読み込むためには一定のスキルが必要であることから、学芸員がその内容を解説することで、記事の質を向上させることを目的としている。

2）に対しては、市職員が中心となって執筆をした場合、記事の主な参照文献となりうる調査報告書は市職員が執筆していることから、その内容の一部が記事執筆の禁則事項である「独自研究」に該当する可能性がある、また記事が第三者によって悪意を持って書き換えられた時、市が関与していると疑われる可能性を排除するための対応であった。

3）については、民間支援まちづくりファンドに採択されている事業であるとはいえ、一団体に特別な支援を行うのではなく、「文化財めぐり」や「文献紹介」という形態の範囲、換言すれば市職員が通常業務として日頃実施している業務範囲内で支援するという対応で行った。

表１　これまでの開催実績

| 実施日 | 執筆記事 |
|---|---|
| 第1回（2017年4月6日） | 高尾山古墳、長塚古墳（県指定史跡） |
| 第2回（同年6月3日） | 清水柳北1号墳、子ノ神古墳（市指定史跡） |
| 第3回（同年7月27日） | 神明塚古墳（市指定史跡）、松長古墳群 |
| 第4回（同年9月30日） | 霊山寺横穴 |
| 第5回（同年11月17日） | 山ノ神古墳、四ツ塚古墳、馬見塚古墳 |
| 第6回（同年12月3日） | 井出丸山古墳、大泉寺 |
| 第7回（2018年1月8日） | 天神洞古墳、妙蓮寺の石棺 |
| 第8回（同年3月4日） | 江浦横穴群（県指定史跡）、井田松江古墳群（県指定史跡） |
| 第9回（同年4月15日） | 興国寺城跡（国指定史跡） |
| 第10回（同年7月16日） | 沼津城、三枚橋城 |
| 第11回（同年11月4日） | 長浜城跡（国指定史跡） |
| 第12回（2019年1月5日） | 松蔭寺（寺内の白隠禅師墓は県指定史跡、木造白隠禅師坐像は市指定彫刻、開山堂・山門は国登録建造物） |
| 第13回（同年3月21日） | インターナショナルオープンデータディの中で、神明塚古墳にQRコードを設置 |
| 第14回（同年6月8日） | 江原素六 |
| 第15回（同年10月6日） | 鮎壺の滝（県指定天然記念物） |

## 2. Wikipedia Town in沼津の内容

こうした体制のもと、これまでWikipedia Town in沼津 は2017年から15回開催してきた。第1回は高尾山古墳・長塚古墳をテーマとし、以下、2017年度は沼津市内の古墳情報の充実及び正確な位置情報を公開するため、第2回から第8回まで古墳もしくは古墳時代の横穴等をテーマに実施した。2018年度以後は城郭や建造物、天然記念物、寺院、郷土の偉人なども扱っており、現在沼津市内の文化財関連記事は25記事を数える（表1）。またCode for ふじのくには沼津市のみならず、静岡市、三島市、裾野市、函南町などでもWikipedia Townを開催している。

また当日の進行は以下のとおりである（図1～3）。

1. 主催者による活動目的
2. Wikipedia管理者による記事執筆の注意事項
3. 市職員によるターゲットとなる文化財の解説
4. 現地視察
5. 参考資料の取得と記事執筆、地図作成
6. 記事内容の確認

図１　市職員による文化財情報の解説

図２　現地視察

図３　記事執筆

記事執筆の取り組みのほか、新規記事として作成された神明塚古墳、霊山寺、大泉寺の３か所に対し、執筆した Wikipedia 記事にアクセスできる QR コードを文化財解説板に設置した（図４）。解説板への QR コードの設置は、Code for ふじのくにより、一年間の「教育財産の一時使用」として申請を行い、沼津市は申請者に対して毎年の報告を行うことを条件に許可している。またその内容について正確性や公平性が著しく欠くと判断した場合には、使用許可期間であっても許可を取り消すことを条件としている。

図４　QRコードの貼り付け

## 3.　実践の成果

以上の取り組みを行ったことによる主な成果は以下のとおりである。

### （1）閲覧数

新規作成した記事の中で最もアクセス数の多いものは第１回に取り組んだ高尾山古墳で、令和３年11月末段階で 79,288 アクセスを数える[2)]。2017 年８月11日には Wikipedia における良質記事にも選ばれており、さらに高尾山古墳の記事は Google 検索において沼津市公式 HP よりも上位に表示されている。

この他、QR コードを設置した神明塚古墳は 3,862 アクセス、霊山寺は 6,363 アクセスを数え、これらは Google 検索の最上位に沼津市公式 HP、次点に Wikipedia 記事が表示される。令和４年 NHK 大河ドラマの主要登場人物である阿野全成のものと伝わる墓を有する大泉寺は 5,567 アクセスと霊山寺には及ばないものの、検索は上位から大泉寺公式 HP、Wikipedia、沼津市公式 HP の順となっている。この他に新規作成した記事はアクセス数上位から長塚古墳 6,424 アクセス、子ノ神古墳 3,366 アクセス、松蔭寺 3,207 アクセスとなっており、QR コードを貼った文化財は貼っていないものと比較しても長塚古墳に続きアクセス数が多いという結果となっている。

### （2）地図情報の充実

記事を作成するのと同時に、その周辺のエリアについて、OpenStreetMap と呼ばれる地図情報の充実も同時に実施した。当初は家の形や史跡などがあまりない状態であったが、2021 年現在では、ほぼ沼津市の全域の詳細な地図が反映された形となっている。これにより、例えば、Facebook のチェックインや地点の情報で出てくる地図は OpenStreetMap が利用されているため、他のエリアのように何もない地図が出ることが回避されている。

### （3）参加者

参加者は各回によって５～20 名程度であった。沼津で行う Wikipedia Town では執筆しようとする対象によって参加者層が異なり、固定で参加するメンバーは１割程度で他は図書館司書、大学教授やウィキペディアンと呼ばれる県外からの参加者が多い。

第１回の取り扱い記事（高尾山古墳）が参加者の大幅な加筆によりウィキペディアの優秀な記事に選考されたことや、開催頻度が多かったことで注目を集めた事で、Wikipedia の編集を趣味とする通称ウィキペディアンのネットワークから口コミで情報が広がり参加するパターンや図書館司書が自分の地元で Wikipedia Town を開催するために勉強に来るということもあった。

地元の参加者では、学生時代に古墳の発掘調査のアルバイトに携わった事があるので、この古墳が懐

かしくて参加をする、または近所の文化財に興味を持って参加するシニア層が多い。

### （4）オープンデータとしての活用

Wikipediaはオープンデータでもあるため、Google HomeやAlexaなどのスマートスピーカーでもデータ元として利用されている。「OK,Google 神明塚古墳について教えて」とGoogle Homeに聞くと、「Wikipediaからの情報です。神明塚古墳は…」とWikipediaの情報を使って紹介してくれるのである。データとして利用可能となることで、このような商用サービスでの利用にも繋がっている。また、同時にGoogleの検索でも、左側に個別の情報や写真が出る際には、Wikipediaの情報が引用されている。

### （5）地域を超えた横展開

静岡県内への横展開によって、地域ごとのプレイヤーや遠方から興味のある人材が来訪してくれることが挙げられる。これにより、他地域（芦屋市、黒部市）でのWikipedia Townの開催など地域を超えた交流が生まれている。オープンデータの促進という意味でも、静岡県立図書館主催のWikipedia Townの講習会を通じて、図書館とICTの連携の可能性が見えてきたことも大きい。これらの結果を、オープンデータと市民協働の事例として、総務省主催の各地のオープンデータ研修でも、Code forふじのくに代表の市川博之が内閣官房オープンデータ伝道師として講師をする際に活用している。

### （6）ICTスキルの向上

データや記事の作成という意味では、PCスキルだけでなく、良い写真を取るということでも貢献できるため、デジカメを使っての高画質の写真撮影や、スマートフォンを使ってGPSの情報を付与した写真の活用で場所を特定することも可能であり、それぞれの特徴に合わせたICTスキルの向上ができる点もポイントである。

### （7）行政課題への気づき

沼津市側としても、普段の文化財講座や文化財めぐりでは会うことのない分野の方々にも沼津市の文化財に知ってもらう機会ができたことは成果と考えている。またアクセス数を見る限り、沼津市HPのあり方についても検討すべき課題があることを認識できたことは成果といえるだろう。また個人的な点でもあるが、Wikipedia Townという場で、文化財とは他分野の方々と話をしたことにより、情報戦略の知識を得ることができたり、ITスキルの向上につながったりしたことは有意義なものであったと感じている。

## 4. 課題

以上の成果と共にCode forふじのくにとして、ここ数年間の取り組みにおいて、3点課題を述べておきたい。1つ目は、コロナ禍によって開催が難しくなっている点である。現地を確認に行く、資料を図書館で探しながら記事を作成するという工程がある以上、感染拡大状況を見ながら、図書館の対応を確認するため、開催を決定しづらい状況となっている。これは、遠隔地にいながら参加したい場合にも当てはまる課題でもある。

2つ目は、新規参加者へのアプローチである。広告する媒体がインターネットを利用した勧誘がメインになってしまうため、知る人が固定化されてきてしまう傾向があり、新規参加者に対してどのようにアプローチするか課題が残っている。純粋にエンジニアやデザイナーにとって興味がある分野ではないため、市民参加と併せて、どのような形で交流を促進するか考えなければいけない。

3つ目は、地域でコーディネーターをどのように増やしていくかという点である。地域も広いため、コーディネーターは各地にいた方がよく、そのような連携が取れていないのが実情である。主催者により、テーマの得手不得手もあるのでなるべく多様なコーディネーターの参加と協力が望ましいところである。

一方、沼津市側からも3点の課題を提示しておきたい。第1に、「Wikipedia記事は信用できない」という不信感が行政の中にあり、この取り組みへの参加が文化財セクションのごく一部のメンバーにとどまってしまっているという点である。実際は公

式 HP よりも上位に検索結果が表示されている記事は公式以上に閲覧されている可能性も高く、またその内容も沼津市が発行している文献を参照して作成されているため、信頼性は低いものではないのであるが、当初からの関わり方が「文化財めぐり」という文化財行政の一業務としてであったことからも、Wikipedia Town への参画が文化財センター単独の業務として捉えられ、取り組みが全庁的に広がっていないのが現状である。

第 2 として記事執筆の難しさである。執筆に際しては質を高めるため、参考となる図書等を参加者に紹介しているが、文化財情報に普段から親しんでいない方にとって、文化財の価値を語るための必要箇所を読み解くことは難しく、そのため一見して理解しやすい内容ばかりを記載する傾向があると感じている。理解しやすい内容は必ずしも文化財の価値を示す内容と一致するものではないことから、完成した記事が一定の人から見れば十分な情報が記載されていないという状態になっている。誘導することは当初目的を考えた場合に問題があるが、より良質な記事を作成するためにもリファレンスする側として、文化財を紹介する能力の向上は本取り組みにおいて必須と思われる。

第 3 は第 2 と関連して、沼津で作成された記事のうち、一部を除いて記事編集がその日限りとなってしまっていることも課題と捉えている。これは執筆者にとって、文化財情報を読み解くことが困難であることに加えて、Wikipedia へアップするためのスキル不足により、全体での執筆終了後に個人での記事追記が難しくなり、編集をあきらめてしまっているためと考えられる。Wikipedia 記事の良点に「新たな情報があった場合に追記が容易」であることが挙げられるが、これが実施されていない、もしくは追記が広まっていかないという状況は大きな課題と考える。

## 5. 今後の展望

こうした市民活動の課題については、時間をかけながらではあるが解決方法をいくつか考えている。まず、図書館に行かないと情報にアクセスできない問題については、市発行の広報誌や、版権に該当しないようにする形で調査報告書等をできる限りオープンデータにしていくことであり、紙でしか存在しない資料についてはデジタルアーカイブしていくことである。これは、実際に市民活動として裾野市で広報誌を全てスキャンする活動をしており、まさにシビックテックの分野で解決できる可能性がある。当然、現地の図書館に行かなければ調査できない資料は残るが、取っ掛かりの資料があるのとないのとでは大きく運営のしやすさが変わってくる。行政として課題提示した文化財以外での部局の参画、記事情報の質の向上についてもこうした取り組みを進めることによって、解決を図っていきたい。

また、参加する人材・コーディネーターについては、「地域の情報は地域が作る」に賛同してもらう人を増やすことでもあり、これから訪れるスマートシティやデジタル社会において地域で活躍する人を育てる・見つける作業と考えている。

行政側も文化財を含む行政情報や関連する情報のオープンデータを推進し、民間・市民が自らで良質な記事を作成できるよう情報にアクセスし易い環境を整えるとともに、さらには学校教育や生涯教育と結び付けて Wikipedia 編集を入口に、郷土を愛し、ICT 技術を用いて地域のことを解決する人材が育ってもらえればと期待している。

**【補注】**

1）Code for ふじのくにの活動については下記のアドレスを参照
https://www.code4numazu.org/

2）新規作成した記事で最もアクセス数の多い高尾山古墳については下記のアドレスを参照
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E5%B0%BE%E5%B1%B1%E5%8F%A4%E5%A2%B3